
チーム グロリエンス Courageous kings

クロカラス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

チーム グロリエンス C o u r a g e o u s k i n g s

【Nコード】

N 7 3 3 6 E

【作者名】

クロカラス

【あらすじ】

昔、『裏の大戦』と呼ばれた戦争があった。その当時最強を誇っていた部隊はほとんどが年端のいかない子供たちだった。それが最強部隊『チーム・グロリエンス』だが、当時のリーダーは今・・・

プロローグ

爆音の音がそこらじゅうに聞こえる。

すぐそこには数え切れないほどの剣や斧を持った人たちがいる。

その前に少年とも言いがたい小さな男の子が立ちはだかる
場違いな男の子が杖らしきものを構えなにやらつぶやいた

すると・・・

驚くべきことにあれほどいた人たちの半数くらいが消し飛んでいた

男の子がもう一回杖を振りかざすだけでもう敵が消え去っていた

この小さな子供の体にどれほどの力があるのだろうか？

この子こそそのちに最強の称号を得る人だった。

男の子は仲間を作った

その名は『チーム・グロリエンス』

やがてその部隊は最強の部隊と呼ばれるようになった

人々は讃え敵は恐れ逃げ出すものまでいた

有利に進んでいたはずの戦が一部隊の・・・それも年端の行かない
子供たちによって変わる

だが、ここでは『あり得ない』ことが『あり得る』ことになる

やがて男の子たちは成長し戦争から抜け出したいと思つようになつた。
それから10年後子供たちは自由をつかんだ。

昔話と自己紹介

本来の昔話なら「むかし、むかし」という常套句で始まるべきなのだろうがこの物語は現在もまだ進行してるし何よりこの物語の主人公は現在14歳

まあもうすぐ1歳年が増えるが・・・

さてこの物語の重要な「鍵」となる昔話を始めよう。

まず、導入部からはじめよう。

ここでは導入部すら大事な「鍵」になる。

君たちは「戦争」を知ってると思う。

戦争といえば63年ほど昔に行われた大戦を想像される人が多いと思う。

そこをさらに細かく想像するなら「兵器」、「兵士」、そしてたくさんの「国」なんかを想像するだろう。

僕たちはこの大戦を「表の大戦」と言っている。

「表の大戦」があつたのなら「裏」もあつたんじゃないかって？

こう考えた君は実にすばらしい

私が先生だつたら100点をあげているところだろう。

そう、あつたんだよ。

「裏の大戦」が・・・

そうそう話は変わるけど君たちは魔法を知っているかな？

魔法なんて君たちの生活からはかけ離れていて分からないかな？

でもね・・・

本当にあるんだよ・・・魔法

魔法だけじゃない

ドラゴンだって妖精だってエルフだっている

見たこと無いって？

そうだね・・・まあ普通なら見えないよね。

でも、魔法使いの国や魔法使いの国はどこかにあるって事を覚えてくれないか

そう、今はね・・・

今はここまでしか教えてあげない

だって君たちはこれから体験することになるよ

この世の『あり得ない』が『あり得る』って事を・・・

僕はだれだって？

それは教えてあげられないな

もしかしたら君の知ってる人かもしれないし知らない人かも知れない

おっと、話が脱線してるね。

じゃ、ここからは昔話になるよ

つまらないかもしれないけど聞いてね。

昔、今から約10年前『裏の大戦』と呼ばれる大戦があった。

いや・・・その大戦は古来からずっと存在していた。

魔法使いたちは、『魔法』『建造物』『幻獣』そして『秘宝』を駆使して戦った

魔法が使えぬものたちは武器を交え秘宝を使い時には、策を練り自身の崇高な理想を築き上げるために戦った

その中でもつとも強くすぐれた部隊があった。
それは200万の敵をもつとせず300のドラゴンにも突っ込んでいく

その部隊の名は『チーム・グロリエンス』

当時最強を誇った部隊

だが、最も驚くことはその部隊は年端の行かない子供たちでほとんど構成されていたということだ。

生まれてすぐのテストで魔力を持つものはすぐに戦場に投入させられる。

本人の意思に関係なく・・・

そして『チーム・グロリエンス』のリーダーは、大戦で最も多くの敵を粉砕しありとあらゆる魔法を使い体術、剣術も右に出るものはいなかったという

当時そのリーダーはまだ4、5歳ほどの子供だったという・・・

それから10年

そのリーダーは『裏の大戦』から姿を消し『チーム・グロリエンス』を脱退した。

今は、中学生をしている。

そのリーダーの名は・・・黒神 永遠 (くろかみ とわ)

それが、最強の名を欲しいままにした者の名前

中学生魔法使い

だいたいのは前は前の2部くらいで分かったと思うからここからは主人公にバトンタッチさせよう。

あまり僕が出てきても物語が進行しないしね

さて、これで僕の事は分かってもらえたと思う。

過去に僕がしてきたことも・・・

だからって僕は後悔しない

今を楽しむことにしてるから・・・それが、僕にできる罪の償いだと思うから

そう思い黒神永遠は生きている

僕には本当の家族も名前も無い

名前は僕の保護者につけてもらったんだ。

僕の保護者はベル・クレメンズさん

クレメンズさんって呼んでる

クレメンズさんも『チーム・グロリエンス』にいたんだ

今は19歳、イギリス人

でも、十三カ国語できるんだって

とってもやさしいんだよ

おっと、もう少ししゃべりたかったんだけど時間がきちゃったね
起きなきゃ

ベッドの横のサイドテーブルの上の黒い指輪のペンダントをつける

この指輪は魔法を使う杖の変わりみみたいなもの
いつ狙われたり魔法が必要になるか分からないからってクレメン
スさんがくれたんだ

下に下りるとコーヒーのいいにおいがする

「クレメンスさん、おはよう」

そう言うとクレメンスさんが笑顔で

「おはよう永遠、朝ごはんできてるから食べましょう」

クレメンスさんの食事

大戦から抜けて5年間つづけてきたことだった

大戦から抜けた『チーム・グロリエンス』は世界中に散らばって
いた。

クレメンスさんも抜けた当時は日本いう中学生

でも4歳下の僕のために、学校には行かず面倒を見てくれた

そんなクレメンスさんを僕は感謝してるし尊敬してる

そんなことを思い出していると

「永遠、学校に遅れるよ」

時計を見ると8時5分

「わわっ、行って来るよ。クレメンスさん朝ごはんおいしかったよ」

鞆をつかんで玄関に向かった。

「じゃあ、クレメンスさん行ってきます」

そういつて僕は毎日の日課であるクレメンスさんの頬にキスをした。

腕時計を見ると8時10分

学校への時間は15分

学校の登校終了時間は8時20分

間に合わないと思うでしょ
でもね
間に合っちゃうんだよ

僕は誰にも見られないような場所に入り
レポートのスペルを頭の中で唱えた
目の前の景色があっという間に変わる
僕は教室に行った

教室に行くと人もそれなりにいてみんな楽しそうに話してる
僕も日本に来た時友達ができるかわからなかったけどたくさんでき
てよかった

もちろん魔法で学校の先生に記憶を変えさせて疑われずにすんだけ
ど学校の勉強なんて全くしてなかった。
毎晩、クレメンスさんにつきつきりで教えてもらった。

「なあなあ永遠、昨日のうたばん見た？」
「ごめん、見てない」

先生が来た
ホームルームをして授業になる
クレメンスさんのおかげで授業は分かる

ふと、外を見ると鳥が飛んでいる
10年前までは見上げるとドラゴンやグリフォンがいた
平和な光景がこっちの世界に来てよかったと思わせてくれる

「コラ、黒神」
しまった。

「俺の授業を聞かずに外を見るとはいい度胸だ。前にでてこの問題

を解きなさい」
まいったなあ
仕方が無い。

黒板の前まで行ってスペルを唱えた。

この魔法は心を読む魔法

僕が大戦時敵の作戦などを知る時に使った魔法

先生の心が僕の頭に入ってくる

(この問題は有名大学の入試問題だ。中学生に解けるわけが無い)

なるほど、やっぱりそうだったんだ
どつりでさっぱりわかんないはずだ。

「どうした黒神。わからんのか？」
しょうがない

僕はもうひとつスペルを唱えた

この魔法は暗号なんかを解くために使ったもので要するに答えが分かる

頭に浮かんだ答えを黒板に写していく
移し終わると先生の顔がどんどん驚愕の顔になっていった。

先生が参考書を見ながら

「黒髪、何で分かるんだ？ 大学入試問題だぞ」
大学と聴いた瞬間クラスの皆からブーイングが来る

僕は先生に

「たまたま知ってた問題だっただけです」

これで今日の授業が終わった。
僕は部活に入っていなかったので家に帰るつもりだった。
いつものように屋上からレポートで帰ろうとした。

ドアを開けるとうちのクラスの長谷川^{はせがわ} 湊^{みお}さんがいた。
ほとんど使われていない屋上に長谷川さんがいたという事にも驚いたけどそれよりももっと驚かされたものがあつた。

「は、長谷川さん、それって」
なんと、長谷川さんの口にくわえられていたのは見間違ひようも無くタバコだった

バンと後ろからドアが勢いよくあけられた。
「コラ、お前ら何しとる」
体育の荒武先生だった。

この先生はとても怖いので有名な先生だった。
「ちよつと来い」
乱暴に僕と長谷川さんの手をつかんで生徒指導室に入った

「おい、中学生がタバコすっていいと思つてんのか!!」
(僕は吸ってないのに)

大戦最強部隊『チーム・グロリエンス』のリーダーがこんなところで説教されてるのを昔の仲間に見られたら笑われるかなーとおもつていると

「聞いているのか、黒神!!」
バキッ

殴られたけど普通の人間からだったのであまり痛くは無い

「ちよつと先生、吸ったのは私だけで黒神君は何もしてないよ
ちよつと驚いた

「そんな言い訳通用すると思ってるのかッ」
今度は長谷川さんを殴ろうしていた

えーっと、誰かを助けるためだったら魔法使っていいってクレメン
スさん言ってたっけ
仕方が無いんだよね。
ほんとはこっちに巻き込みたくないけど・・・

僕は睡眠のスペルを唱えた。
指輪が光る

途端に荒武先生は眠むり倒れた。
長谷川さんは僕のほうを見た。

「今のつて黒神君がやったの？」
驚きの目で僕を見る。

できれば記憶改ざんの魔法を覚えてたらよかったんだけど今練習中
だったからむりにやると爆発とかするかも知れない
今の僕にできること
それは

「皆には黙っててくれないかな」
お願いするしかない

「魔法使い？ほんとの？」

「そうだけど」

「じゃあ厚かましいとは思うけどどこか住めるとこない？」
住めるとこ？」

「住めるとこって長谷川さんの家は？」

「今、親と喧嘩してるから」

結局2、3日中に出て行くことと黙っててもらえるといっので僕の家に泊まってもらうことにした。

レポートのスペルを唱え腕をつかんでもらう
こうすることで2人で魔法の効力を得るんだ

家の庭に着いた。

「着いたよ」

「うわっここが黒神君の家？」

そうだけど、と言いながら家に入れた。

「お帰り〜遅かったね」

クレメンズさんが出てきた。

「あれっ？永遠、こちらの方は？」

僕は情報伝達のスペルを唱えた

こうすることで伝える情報に齟齬が発生しなくてすむ

「そう、じゃ中に入れてもらいなさい」

そういってクレメンズさんは僕たちを招きいれた

「とりあえず夕食にしましょう」
そういって3人で夕食をとった

夕食を終えた時にクレメンズさんが

「長谷川さん、この家にいるとはタバコをやめなさい」
と、いって今度は僕に

「永遠、長谷川さんに禁止の魔法かけなさい」

僕は言われたとおりに秘密の禁とタバコの禁をかけた。

「さっこれで、2日でも3日でもうちにいていいわ」
そういってクレメンズさんはお風呂の準備をしに行った

「ありがとう、タバコやめさせてくれて」
そういって長谷川さんはタバコの箱を差し出してきた。
僕は受け取ってタバコの箱を消失のスペルで消した。

「永遠ーお風呂はいつちやいなさい」

長谷川さんに、行くねといっって僕はお風呂に入った。
行く時にクレメンズさんがあなたのことあの子に話すわといっって出
て行った。

昔の話だろうと思えばらく風呂に入った

こうして、この家に新しい同居人が来た

新しき同居人（前書き）

パソコン修理完了更新スタート

新しき同居人

お風呂から上がるとクレメンスさんと長谷川さんが話していた。

「へえー、黒神君がその『チーム・グロリエンス』のリーダーだったんですか」

僕のことだ。クレメンスさん、昔の大戦のことまで話してるんだ。

「あの、上がりましたけど」

「そう。じゃあ、長谷川さんゆっくりつくりつかつてきなさい。着替え、置いてくから」

「永遠、今日も記憶の魔法しますよ」

「あつ、はい」

そうして僕は、9時まで魔法の勉強をしていた。

覚えたスペルを指輪にも記憶させる

こつすることにより詠唱スピードが速くなる

僕は、自分の思っていたことを口にしてみた。

「あの、長谷川さんの記憶は消したほうがいいですか？」

「急いで消すことも無いでしょう。それに、貴方のことを知る人が居てもいいと私は思います」

リビングに戻ってみると、長谷川さんが上がっていた。

「あっ、お風呂ありがとうございました」

「いえ、では私もお風呂に行つてきます」

クレメンスさんが居なくなつたところで僕は、気になったことを聞いてみた。

「どうして、タバコ吸おうと思つたの？」

「フフツ、痛いところ突くね」

「あっ、ごめん」

「別にいいよ。答えてあげる」

長谷川さんの話によると、両親がつくつた借金を残して二人とも蒸発してしまつて頼れる親戚もなく自暴自棄になりその勢いでタバコを吸い始めたのだという。

「借金つてどれくらいあるの？」

「大体8700万円くらいかな？子供に払えるわけ無い額・・・借金取りのやつらにも追われて疲れちゃつた」

「そういうことなら私たちが貸すわよ？」

いつの間にかクレメンスさんが後ろに立っていた。

「貸すつて・・・8700万円ですよ？」

「ええ、8700万円貸すわよ？私たち仮にも戦争で大金を頂たら・・・」
「そうだった。大戦を抜ける時にもらったお金がたくさんあるんだっ
た。」
「日本円に直すと確か・・・国家予算すら軽く超えてしまっんじゃないかな？」
「もちろん税金を払う代わりにいろいろと奉仕活動してるけど・・・
裏の仕事だけだね」

「でも・・・」

「いいのよ。いままでで一番大きな買い物だったこの家買ったくらいだし、なんたって日本の国家予算よりあるのよ」

「ホントに・・・いいんですか？」

「いいに決まってるじゃない。でね、条件があるんだけど・・・」

「条件・・・何ですか？」

「貴方がこの家に住むことよ」

「ええええええつ？」

僕も驚いてしまった。

「だってそうでしょう？長谷川さんのご両親はいらっしゃらないの
でしょう？」

「それは・・・」

「それに、1人でどうやって生きていくの?」

「でも……」

「いいのよ。1人位増えてもうちは全然構わないわ」

「それと、これは長谷川さんがよかつたら、何だけど……」

「何でしょうか?」

「貴方も魔法、習ってみない?」

「えっ?魔法ですか?」

「私、妹ができたみたいで嬉しいのよねっ、習ってみない?」

「覚えておいて損はないと思うわよ」

「え〜と、じゃあ習ってみようかな?」

「そう、じゃあ早速明日教えてあげる」

そういうと、すっかり蚊帳の外だった僕に

「永遠、貴方の予備の指輪と杖と初心者用魔法書、持ってきなさい」

僕は、部屋から指輪と杖と魔法書を持ってくると僕の手から3点セ
ットをとって

「ハイこれ、貴方専用の魔法具よ」

「それじゃ、2人とも明日学校はお休みしちゃいなさい」

「えっ？何で？」

僕が聞くと

「明日は、長谷川さん・・・ううん、澁ちゃんの借金を返しに行くのと家具を買いに行くのよ」

あの、クレメンスさんがこうなるなんてよっぽど嬉しかったんだな

「永遠、今日のうちにお金持ってきておきなさい」

「分かりました」

僕が部屋から出ようとすると

「ホラ。澁ちゃんも行って来なさい」

僕たち二人は、お金の置いてある部屋の前に来た。

ここは地下3回あたりでこの部屋は、上から下までお金の束で、びっしりと埋まってる。

もちろん、盗難防止用魔法が他のところと比べて嚴重にかけられている。

解除のスペルもそれなりに難しい

「ちょっと下がってね」

『グル・バルグ・ナグネリア・トラシルバ・ネル・ストラトル・・・』

』

開いた。

「わぁー」

僕にとつてはもう見慣れた光景が、長谷川さんには驚くことだと思う

「く、黒神君。これが稼いだお金？」

「う、うん。まあ大体」

「すごい、こんなお金見たこと無い・・・」

「さっ、お金詰めよう」

そういつて僕は、アタッシュケースにお金を詰め込んでいった。

扉を閉める時にまたスペルを唱えて莫大な財産のある扉をあとにした。

「あつ、澪ちゃん。貴方の指輪に魔力と初歩魔法覚えさせたわ」

「は、はぁ。」

「回復系魔法と攻撃系魔法と浮遊魔法を1つずつ。ねえ使ってみて」

「えっ、もう使えるんですか？」

「そうよ。あつそつだ。指輪、指に直接つける？首にかける？」

「えーと、黒神君はどうしてるんですか？」

「僕は首にかけてるよ。」

そんな僕たちの様子を見ていたクレメンズさんは

「んもう。今日から家族も同然なんだから」

クレメンズさんが僕の肩を持って

「澁ちゃん、この子のことは名前で呼んでやってくれない？」

「えっ？」

長谷川さんは、何故か顔が赤くなってるけど風邪かな？

「黒川君は、良いの？」

「えっ？僕？別に構わないけど？」

「じゃ永遠も澁ちゃんって名前で呼んであげなさい」

「うん？いいよ」

「さっ澁ちゃん。永遠とおそろいの指輪のペンダントよ」

「そ、そんな。クレメンズさん」

「さっ、今日は明日に備えてもう寝ちゃいましょう」

そういうと、クレメンズさんは思い出したように

「そうそう。澁ちゃん、今日はまだ貴方の寝るところが無いから悪いけど、永遠の部屋に泊めてもらって」

「えええっ」

「僕の部屋って、クレメンスさんのところは？」

「私のベッドは小さいの、貴方のベッドはすぐに大きくなるからってすごく大きいのが買ったじゃない」

「で、でも。私」

「アラク、嫌なの？永遠のベッドじゃ？」

「クレメンスさん、来客用のベッドが・・・」

僕は最後まで喋れなかった。

口に粘着性のテープが飛んできた

「大丈夫よ。この子襲いはしないから」

「でも・・・」

「それとも襲って欲しい？」

「ムグムグ・・・」

必死に取ろうとはしてるのだがなかなか取れそうに無い

「そんなっ・・・」

「良いじゃない。あの子、鈍いし今までがアレだったから」

ようやく取れた。

「鈍いって何の話？クレメンスさん」

「さっ、私はこれで失礼するわね。お休み」

そういつて、クレメンズさんは、自分の部屋へと言ってしまった。

「と、いう訳だけどどうする？」

「どつって、永遠君はいいの？」
何がだろつ？

「僕？別に構わないよ」

「じゃあ、泊めてもらおうかな」

僕の部屋はそこまで物があるわけじゃないので人が2人になっても十分なスペースがある

ベッドもクレメンズさんとこの家に住み始めたときにすぐに大きくなるからといって人が3人ほど寝れるくらいの大きいのを買った。

「もし、嫌だつたら僕は床に寝るけど？」

「いやつ、そんなことは無いけど」

「そつ？じゃあもつ寝るよ」

「あつ電気、真つ暗にしてもいい？」

「へつ？良いけど・・・」

「そつ、じゃお休み」

「お休みなさい」

僕は、今日は普段より多めに魔力を消費したのですぐに眠れた。
別に、今日使った魔力は、僕にとっては1不可思議分の1にも満た
ないけど普段よりは若干疲れたという程度かな

借金返済

チュン、チュ、チュン

小鳥の鳴き声がする。

朝かな

眼を開けると隣に人が居たのでびっくりして声を出してしまった。

「うわあああっ！」

そっだ

昨日は長谷川さんと寝たんだった。

長谷川さんも起きてしまったらしく

「あっ、おはよう」

「ごめん、起こしちゃったね」

「えっ？いや・・・」

「じゃっ、僕下に行くから。着替えてきなよ。指輪もつけて来てね」

下に降りると、クレメンズさんが朝食を準備してくれていた

「おはよう、クレメンズさん」

「おはよう、永遠」

トントンと長谷川さんが降りてきた。

「おはようございます」

それから3人で朝食をとり終わると

「さつ、もう学校には連絡しておいたから早速行動しましょ」
分担はクレメンスさんが部屋と食材の用意

僕と長谷川さんが、借金返済と家具の買い付け

アタッシュケースと財布に30万を持ってクレメンスさんが調べた
金貸し業者のところへレポートした。

門を見ると槌喜多組と書かれてる。
もしかして・・・

「もしかして、ご両親がお金を借りられたのって・・・」

「そう。ここ、槌喜多組から」

僕たちは、門をくぐった。

「おい、ガキがここに何のようじゃ？」
これがヤクザさん？

「え〜とですね、長谷川さんのご両親がここからお金を借りられた
そうなのでここの責任者にお取次ぎ願いたいのですが」

「長谷川ああ？まあいい、金は持ってきとるんじゃろつなあ？」

「はい。ここに借りたお金より1300万円多い1億が1億と聞いて男たちの顔が緩んだ

「そうかそうか。まあ通れや」

僕たちは奥へと通された。

「金は？」

「1億持つてきました」

「残念だったな。昨日までは1億でよかったんだが今日から2億になったんだよ。利子だよ」

「そんな法外な利子を払う義務はありません。1億で十分でしょう？」

「ホラ、ここに借用書があるんだ。さっさと払いやがれ！」

「失礼します。さっ行こう。長谷川さん」

僕たちが帰ろうとすると男たちが4、50人集まってきた。

「通してください」

「力ずくで通ってみろや！がはっは」

1番強そうな男の人に釣られ笑い声が大きくなる

「怪我しますよ？」

男たちの笑い声がまた大きくなった。

「怪我するよだってよ。ヒヤハハ」

「言うねえ。兄ちゃんやってみろや」

「では、怪我したくない方たちはどいてたほうが良いですよ？」
誰も動こうとしない・・・いいのかな？

「では、槌喜多組は本日解散ということだ」

攻撃のスペルを唱えた。

このスペルは、攻撃の呪文の中ではあまり強くないほうだけど・・・
男の人の横にある柱に触れて

ドギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアン

門ごと吹っ飛ばしてしまった。

もう少し力を抑えたほうが良かったかな

後ろに居た人たちに振り向いて

「ハイ、これで槌喜多組は解散してくださいね。それと、早く救急
車呼んでやってください」

やはり力が大きかったためか外のほうで半分以上の人たちが伸びびて
る。

参ったなあ。

大戦の時は思いつきり力を振るえたのに・・・
少し力を抑える練習してみようかな？

「さあ、長谷川さん。家具、買いに行こっか」

そついうと長谷川さんは、怒ったように

「漣。漣って呼んでくれるんじゃないの？」

クレメンスさんの影響かな？コレ

「分かったよ。行こう漣」

「うんっ」

それからは、家具を買っては家に居るクレメンスさんに転移魔法で部屋に入れてもらうという作業を繰り返した。

辺りが紅色に染まったところ・・・

3人で夕食を食べていた。

「今日は大変だったね。永遠、漣ちゃん」

「別にそこまでってわけじゃないよ」

夕食をとり終わり漣の部屋の家具の配置に追われた。

11時によやく部屋らしくなったところで僕は失礼した。
肉体的にも疲労が蓄積していたのですぐ眠れた。

その日は夢を見た。

何年も前の夢だ。

爆音、血、武器

力のみがものをいう悪夢

オーク、獣人、エルフ、ヒューマン、魔獣

それら全ての生き物に家族、友が間違いなく居た
そして何年も生きてきたものたちを一瞬にして葬り去ったのも僕で
あり同じ生き物だった

魔法、剣、拳

終わることのない復讐の連鎖が今もまだ続いているのかと思うとこ
の平和のほろが夢に思える

昔、仲間聞いたことがあった。

この戦いが終わったらどうするのか、と

魔法の国、魔法の島を転々と言った

そういえば、このあと重大なことを言われた気が・・・

朝だ

何かを思い出した気がするんだけどなあ

いつものように僕は下へと降りて行った

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7336e/>

チーム グロリエンス Courageous kings

2010年10月10日17時28分発行